

# 響け開港期の音色

## 当時のオルガン発見

菓子メーカー社長が入手 来月13日横浜で演奏会

開港間もない明治初期に横浜の外国人居留地にあった楽器商「ドーリング商会」が輸入販売した米国製の足踏み式リードオルガンが見つかった。横浜の歴史・文化にちなんだ商品開発を手掛ける菓子メーカー三陽物産（横浜市中区）の山本博士社長（49）が昨年入手。現存品は非常に珍しく、修復を終えたことから10月に演奏会を開催し、明治期の人たちを魅了した音色を初披露する。

（三木 崇）

山本さんは18859年の横浜開港後に撮影された写真や絵はがき、輸出用に横浜で作られた陶磁器「真葛焼」の収集家。昨年2月、ネットオークションに出品されていた古いオルガンを見つけ、岐阜県の古物商と交渉の末に7万5千円で購入した。

決め手は「輸入元 横浜百九番館 ドーリング商会」と記載された銘板。81年に開業したドイツ系の楽器商で、ピアノ製造と西洋楽器の輸入を手掛けていた。同社で修業を積んだ日本人の一人に、国内初のオルガンを横浜で製造したとされる西川虎吉がいるなど、西洋楽器の日本における草分け的存在だった。

オルガンは、国内で数台というスミス・アメリカン社製。いすとともに保管状態が良好で、外観に目立つた傷や腐食はなかった。当

初は音は出なかったが、専かち合いたい」と話し、今後は明治期に建造された教会や洋館でクリスマスなどに演奏会を開くなどの企画を検討したいという。

修復したことで開港期の音色がよみがえった。

山本さんは「開港期から数多くの人たちの手で奏でられ、大切にされてきたオルガンが再び横浜に戻ってきたことは意義深い」と感無量。「教会や洋館から漏れ聞こえるオルガンの音色は異国情緒にあふれ、初めて聞いた日本人はとても感動したことだろう。開港期の音色を奏でるリードオルガンの魅力を多くの人と分む。先着順で参加無料。



明治初期に輸入されたオルガンと、入手した山本さん三陽物産の本社ビル「輸入元 横浜百九番館 ドーリング商会」と書かれた銘板